

“アサマトの橋”

人が言うには、昔、何百年も前に、アラマシ山脈にウラップという勇者が生活していた。そこで、彼は、数知れない、数え切れないほどの家畜を飼っていた。災害も、不幸も、彼を襲うことはなかった。

ところが、ある日、山々は、脅かすかのように、音を立て、轟き始めた。それまでは、そのようなことが起きたことはなかった。雷鳴が鳴り響き、稲妻が走り、雨が急流のように降った。山々の湖や川の水は岸を越え始め、その谷の緑の野原を水浸しにした。水の流れはだんだん大きくなり、ウラップの家畜の群れは飢えに苦しみ始めた。

そこで、ウラップは、力をなくした牛や馬や羊を連れて、山脈を離れて遠くの水のないところまで運び始めた。三日三晩、ウラップは群れを運び続けたが、運び終えることはできなかった。そこでその災いから彼を救ったのは、一人で暮らしていたアサマトという老いた、勇ましい鍛冶屋だった。七日七晩、その老人は鉄を打ち、素晴らしくよく光る、地に咲く花のような鉄の橋を造り出した。橋の片側はアラマシ山脈に連なり、反対側はボルガ川の岸に立った。

ウラップの母は、その橋を使って、飢えた家畜の群れを、音を立て轟いている山脈から離れ、緑の牧草地の方に追い立てた。群れが橋を渡り終えるとすぐに、橋は目の前で消えてしまった。

この話がもとで、チュヴァシ人たちは、雨が降る中で雲をわたって見える虹のことをアサマトの橋と呼ぶのだ。